

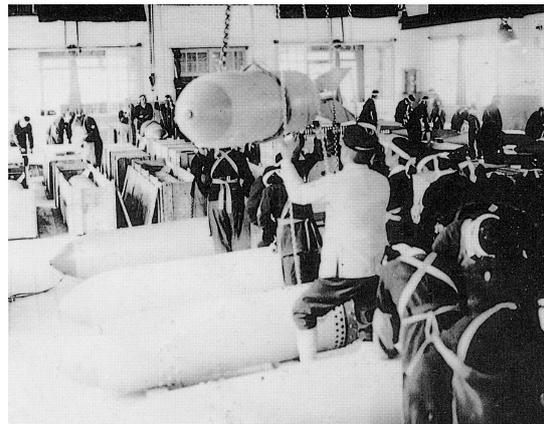
「戦争を始めたころ、日本は不景気で、多くの人は仕事がなく、生活は苦しく、食べる
ことさえ難しい、つらい暮らしをしていた。だから、多くの大人や、本当は学校にい
きたくてもいけないような15、16歳の子どもたちも、家族を守り、生きていくため
に、遠く県外からも呉に仕事を求め、職業軍人や海軍工廠で働くためにやってきたん
だよ。」

「家族を守り、生きていくために戦場で働いたり、戦争に使う兵器をつくる工場で働い
たりして必死で生きてきた。そうやって、必死で生きてきた人びとに対して、戦争を
したのはまちがいじゃないかと、単に非難するのは、胸が痛む。このような、国の流
れ、国の政治の仕方がまちがっていたとぼくは思うよ。」

「ぼくは、若い世代のあなたたちに、歴史を正しく理解してもらいたいのが願いだ。現
代史や近代史をしっかり勉強してほしい。なぜならば、今を、生きることは、過去を
知らないといけないのだから。今は、過去が生んだんだよ。過去からいろいろ学べる。」
と武田のおじいちゃんは、太平洋戦争当時の呉を中心とする社会状況と、自分なりに
捉える太平洋戦争に対する胸の内を話して下さった。



広島造船廠恩察食堂 昭和15年ごろ



砲弾の製造に従事する女子挺身隊（吉浦町呉工廠火口部）
昭和19年～20年初頭

太平洋戦争中のおじいちゃん、おばあちゃんたちの青春時代は、14、15歳の子どもたち
が「学徒動員」に、今の高校生にあたる17、18歳の子どもたちが「動員学徒」に、女学校
を卒業したばかりの乙女たちが「挺身隊」へと、学業をすて、青春をすて、兵器をつくり、
戦争の為に働き、戦争の為に死んでいったのです。『命』を散らしていったのです。学校
でも、「戦争に勝つ」ことだけが優先され、子どもたちは、勉強どころか、修学旅行にも
いけなかったし、空襲をうけ、「ウー、ウー」という警戒警報のサイレンで、必死に防空
壕に逃げ込むという学生時代をすごされたのです。

もし、みんなが、今、そういう立場になったらどうしますか？「兵士」、「学徒動員」、「動員学徒」、「挺身隊」が、例えば、自分、自分の兄弟姉妹、友だち、子どもだったと仮定してごらん下さい。そういう立場に立つと、「どうして、おじいちゃんやおばあちゃんたちは、あんな悲惨な戦争をしたの？」と尋ねられると、「責められているようでつらい」と言われる気持ちが少しはわかるだろうと思います。

また、おじいちゃん、おばあちゃんたちは「ヨーロッパ・アメリカなどの植民地となっていたアジアの国々を独立させ、日本を中心とするアジアをつくろうという、国が勧めた『大東亜共栄圏思想』を信じながら、戦争をしたそうです。（その頃の多くの人びとは、どうして戦争がはじまったのか、どうして戦争をしなければならないのか、自分の国内の状況、他国の状況もよくわかっていないまま、そして、それを尋ねる場も機会もないまま、戦争に巻き込まれていったのが、現状のようです。）しかし、いくらどんな理由があったとしても、戦争をすることで、「戦争の勝ち負け」に関係なく、それぞれの国で、多くの人が死に、家族を失い、自然が壊されたり、生活が壊されたりしたのは事実です。現在の他国でおきている戦争もそうだと思いますか？

そう考えると、戦争を体験してしまったおじいちゃんやおばあちゃんたちも犠牲者です。戦争を体験したおじいちゃん、おばあちゃんたちを、単に非難するだけではなく、その時代に生きた人びとを理解し、苦しみや悲しみを共有したら、おじいちゃんやおばあちゃんが、生きている間に、自分たちが知っている限りのいろいろな事を私たちに伝えようとしてくださっていることが素直に耳にはいってくると思います。

私は、戦争もなく、何不自由なく、自由に学べる時代に生き、おじいちゃんやおばあちゃんたちより、学ぶ時間も、場所もあり、好きな学びをできる環境にありながら、果たして、その環境を有意義に過ごしていたのかなと反省します。

みんなは、有意義に学生生活、あるいは一日一日を過ごしているかな？私たちは、戦争もなく「平和」に生きている今の一日一日の時間をもっと大切にすごさなくてはと思います。



電気実験部に配属された新庄学園の23名の女子動員学徒（呉工廠内） 昭和19年6月12日

太平洋戦争をしていた頃の、日本の政治の仕方は「国民主権」、「基本的人権」はおさえられ『**国家主義**』で、『**徴兵制**』があり、『**軍国主義**』で、『**戦争に勝つ**』ことが最優先されていたのです。だから、兵隊になるのはあたりまえで、特攻隊になった若い搭乗員たちは、国を信じ、片道の燃料と爆弾をつめ、死ぬのはわかっているのに家族や故郷のために、任務を遂行したのでしょう。「お国のために死になさい。それが日本の為」と子どものころから、国に教えられていた時代だから、その教えをみんな信じていたのです。だから、このように死んでいく人たちを誰も止めることも、守ることもできず、家族も本心をおさえ、涙をこらえて見送っていったのでしょう。そして、子どもから大人まで、国の為に兵器をつくり、戦争のために働き、戦争のために死んでいったのです。

今のみんなだったら、「おかしいよ」とか「嫌だよ」と自分の思いを、自由にしっかり話すでしょうけれど、その頃は「戦争は反対」など国にいろいろな不満・疑問を持っていたとしても、自由に口にすることさえできなかったのです。



ちょっと難しい話になりますが、今の「日本国憲法」にあるような、『**もう二度と戦争をしない**』という『**平和主義**』、『**国民主権**』、『**基本的人権**』などの考え方は、太平洋戦争が終わるまでの「大日本帝国憲法（明治憲法）」ではおさえられていた事をみんなに知っていて欲しいと思います。国が国民一人ひとりの『**生命**』や『**権利**』より、国の政治の仕方を優先していたのは、まちが이었다とあなたたちも思いませんか？

現在の「日本国憲法」に決めてある「平和主義」や「国民主権」そして、「自由権」・「平等権」・「社会権」などの「基本的人権」や「地方自治権」などは、『国民一人ひとりの生命や権利を国が守ることを保障したもの』であり、私たちみんな一人ひとりにある大切な権利だということを再認識して欲しいと思います。

「国民」の生き方、あり方と、「国」のあり方を決める「憲法」のあり方は、重要な意味をもつのだなと強く思いました。また、「日本国憲法」は、私たちみんな一人ひとりが、守らなければならないだけでなく、政府（総理・各大臣・官僚）・議員など、どんな立場の人誰でも守らなければならない義務があることも知っててください。私も『**憲法**』にもっと関心を持ち、意味を正しく理解しなくてはと思いました。



3章 軍港都市「呉」の歴史

日本最後の戦争である、太平洋戦争前半までは、日本は、よその国で、戦闘を繰り返していました。

ところが、太平洋戦争後半になると、日本国内にも戦闘がおよび、相手の国の飛行機が、たくさんやってきて、爆弾や原爆を落とし、おじいちゃんやおばあちゃんたちが、住んでいた町は、突然火の海になり、多くの人びとが死に、何もない灰の中にほうりだされました。

広島や長崎に原爆が投下され、沖縄では、その地で激しい戦闘が繰り広げられたのは皆も知っているでしょう。その頃には、日本中のいろいろな町が焼夷弾で焼き尽くされました。みんなが今住んでいる呉もそうです。みんなのおじいちゃんおばあちゃんたちが、生まれるよりずっと前は、呉も小さな半農半漁の村で、平和に暮らしていました。

ところが、1889年（明治22年）呉の町にも、軍港と海軍工廠（船や飛行機・兵器など戦争に使うものを作る工場）ができ、兵隊や海軍工廠で働こうとする人びとで、あっという間に、人口が増えました。そして、働く人のためにいろいろな店や、映画館などもたくさんできて、呉は、活気のある「日本一の軍港都市」になったのです。そして、激しい空襲を何度も受けて、焼け野原になったのです。

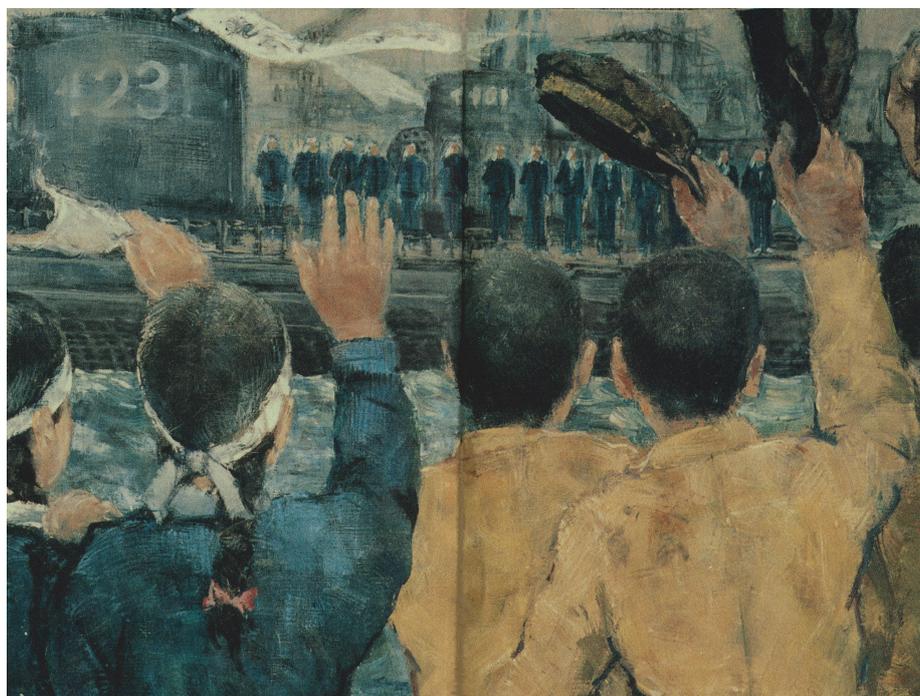
「呉空襲記」、「黒い盆地」、「呉を語る」などの体験手記集や、「呉・戦災と復興」、「呉のあゆみ」などの写真集、「呉の戦災」など呉空襲を記録した資料、及び「赤い月の街」という映画が、呉空襲の悲惨さを私たちにいろいろな事を伝えてくれています。



焼け野原となった呉市街。現・本通3丁目付近から両城方面をのぞむ。中央の建物は住友銀行。

父と家が近所だった高橋のおばあちゃんはその頃の事を、私に教えてくださいました。高橋のおばあちゃん(戦中派)は、自分の体験したあんな怖い思いは、みんなに体験してほしくないよ、「戦争の恐さと平和の尊さ」を小学校でも、子どもたちに話されています。

「1932年～1933年(昭和7、8年)頃、呉海軍工廠の各工場の煙突からは、昼夜をとわず、おびただしい黒煙が吹き出し、クレーンの作動のための騒音等が、毎日耳をつんざくばかりに鳴り響いていたよ。小学校の子ども的人数も多くなり、講堂を区切って、仮設教室にしていたくらい、そのころの呉は、それは、それは、活気のある町だったのよ。でも、戦争は、次第にはげしくなり、女学校を卒業すると、わたしはすぐ、呉海軍工廠の女子挺身隊になり、砲こう部設計係に配属になったのよ。」



特攻部隊「菊水隊」を見送る男女動員学徒(呉海軍工廠) 昭和19年11月

「昼休みの時、自分たちが働いていた工場に近い潜水艦基地から、乗組員が戦地に向かって出港する時、お見送りもしたよ。そのときの光景は今でも忘れることができないの。潜水艦の甲板に将校さんや水兵さんたちが横一列に並び、別れを惜しむかのように、呉湾に臨む周囲の山々や見送る人びとをジーンとみつめていた。それから、艦上から小さな包みを投げてくれたの。その小さな包みの中には、その頃一般市民が手にすることもできなかったチョコレート、お菓子、石鹸などが入っていたのよ。もう帰ってくることのない、戦場に向かう勇士たちへのねぎらいの品々だったけれど、あとは頼むぞ、強く生きぬけと目が語っていた。彼らの精一杯の心をなげてくれたんだと思うと、今でも涙がでてくるよ。」としみじみと語って教えてくださいました。